

## 写真

住職 福島伸悦

写真は真（まこと）を写すと書きます。最近、自分の写真を見て、「ええー」と思わず声をあげてしまう時があります。シワやシミ、目のクマをみて唾然とします。「こんなはずではないのに！」自分の年も顧みず、まだまだ若いつもりですが、写真は嘘をつきません。

某フィルムのCMで、店員役の岸本加世子さんとお客さん役の亡き樹木希林さんの軽妙なやり取りで「美しい人は美しく、そうでない方はそれなりに」という会話が思い出されます。最近はというと、シミ、シワなど簡単に修正ができ、見間違えるほどきれいになってしまいます。ですから、真を写す写真が真ではなくなっています。

禅語に「心（こころ）は万鏡（ばんきょう）に随って転ず」という教えがあります。鏡は被写体をそのままに写すものです。ありのままの姿を写しますが、人の心はその時の状況によって揺れ動くものです。なんとなく固定したものと考えているようですが、本来固定したものではなくコロコロと動くものなのです。

心そのものはもともと鏡のように無心に何物にもとらわれないものなのですが、そこに「おれが」という本来鏡のような心を曇らせてしまう厄介なものが出てきてしまうのです。

私たちは、本来自由な心の流れを「おれが」という執着によって止めてしまうのです。すると、その時の印象が心に固着されてしまうことになります。つまり、そのことをいつまでも引きずることになるわけです。

あれは好き、これは嫌いというように分別して、それにこだわってしまいます。これが煩惱という正体なのです。せっかくのきれいな心も、煩惱の垢でドロドロになってしまいます。ですから、心のメカニズムを知っていると客観的に鏡のようにありのままの姿を心に写すことができるのだと思います。